

「サーツ寺子屋」第3回は、少しばかり大きなタイトル「建築はどうあるべきか」をかかげ、岡本直氏の司会により2021年5月29日(土)13時30分から90分の講座が開催された。

神田順著の新刊「小さな声からはじまる建築思想」(現代書館)が建築部会で話題となり取り上げられた次第である。これからの建築や社会のあり方を訴えたということで、専門家以外の一般の方の参加も念頭に、講演が行われた。

◎はじめに

ハンナ・アーレントの「人間の条件」が紹介された。労働と仕事の違いは何か、科学技術と人々の生活のかかわりなど、生きることの基本的考察は、多くの建築家によっても引用されている。

◎第1章「人間の生き方を法律が決めてよいのか」

普段、法律はあることを前提にするので、法制度を変えることはなかなか考えようとしにくい。しかし、ネグリやアガンベンを読むと、人の生き方まで法律に決められて息苦しい今の社会を、専門家としてできることがあるのではないかの思いが募る。イタリアの古都ボローニャで、自分たちのまちのあり方を自分たちで決めて、歴史や文化、そして職人を大切に、そんな社会を築けないかという問題提起である。

◎第2章「建築基準法」から「建築基本法」へ

75年前につくられた建築基準法が1998年の大改正で、ますます膨大な規制と化し、時代遅れになっている。一例として耐震基準がガラパゴスといわれるのは、例えば、建築基準法の地震荷重を決める地域係数が、防災科技研で公開されているハザードマップと整合していないこと。建築をつくりやすくするための制度は、持続可能社会にあわない。

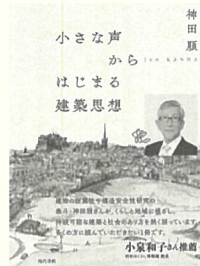


図1 小さな声からはじまる建築思想



図2 ボローニャのまち by 陣内秀信



図3 地産地消

スクラップアンドビルドで、経済だけがまわっても資産として蓄積されない。

◎第3章「一人ひとりの生活のための建築」

建築基本法を議論する中で影響を受けた人たちとして、JT生命誌研究館の中村桂子、社会的共通資本の宇沢弘文、1960年代の釜石市長の鈴木東民を紹介された。水戸街道の小金宿や弘前市の前川國男の建築から、建築が文化であり、歴史が感じられることが、暮らしの豊かさにつながるという。

◎第4章「阪神・淡路大震災の衝撃」

誰も衝撃を受けた震災から、わが国の耐震水準を知ることができる。600ガ

ルレベルの揺れで1.5%の建物が倒壊した。1981年以降の建物に限ると0.5%になる。耐震診断を進めることとなったが、耐震診断の基準と新築の基準法の基準ともずれがある。

◎第5章「耐震偽装問題とはなんだったのか」

耐震偽装がきっかけで、2006年から始まった構造計算適合性判定は、専門家のピアチェックとは異なる。法の定める安全と現実の安全との違いがある中で、法を強調するとおかしくなる。

◎第6章「原点としての東北地方太平洋沖地震」

筆者は、震災直後から建築基本法定準備会の協力のもとで釜石市唐丹の復興支援を続けている。まちづくり会社も設立し、現地のスギを使った伝統工法による事務所兼住宅も建て、これから都会との交流による漁村集落のまちづくりが期待される。

◎第7章「学校教育の役割と小学校の可能性」

建築をもっともっと小中学校で教えてほしい。都会の生徒との交流も図れるとよい。

◎第8章「まちづくりと民主主義」

経済至上主義が自然災害の拡大をもたらす。住み手が望ましく思う建築が生まれるには、民主主義が基本になる。石川幹子の「都市と緑地」(岩波書店)から学ぶことも多い。さらに、ファーガソンの「文明」(勁草書房)、ダイヤモンドの「文明崩壊」(草思社)もこれからの社会を考えるうえで参考になる。

講演のあと、谷垣正治氏の司会で、意見交換の時間ももたれ、また、終了後は、多くの方から感想なども寄せられた。今後も、寺子屋オンライン講座が一般の方へのサーツの発信の場として充実していくことを期待する。(神田 順)